

茨木機關潛行記

本田忠尚

第一章	敗戦直前のシンガポール	……	八
	航空から地上へ	……	八
	怒れる特操	……	一六
	特務機関に転用	……	三
第二章	諜報戦の日々	……	三
	英木機関の面々	……	三
	マレーの共産軍	……	三
第三章	敗戦の混乱	……	三
	聖戦目的完遂へ	……	三
	物資調達に大活躍	……	三
	山中の捕虜	……	三
第四章	捕まった「反乱軍」	……	三
	スマトラ上陸	……	三
	追手は近衛第二師団	……	三
	アチェの西岸めざす	……	三
第五章	インドネシア独立と英軍の進駐	……	三
	インドネシアの情勢	……	三
	英軍の進駐、オランダの復帰	……	三
第六章	メダンの銃声	……	三
	英軍のスマトラ進駐	……	三
	植物の王国	……	三
第七章	帰らぬ特殊永久課者	……	三
	残存者の運命	……	三
	二人の居候	……	三
第八章	トバ湖の天孫族	……	三
	バタック族とともに	……	三
	翻訳班	……	三

第九章 タパヌリ高原の屯田兵

チガリングでの生活

ムルデカ(独立)!

帰国

あとがき

……三三

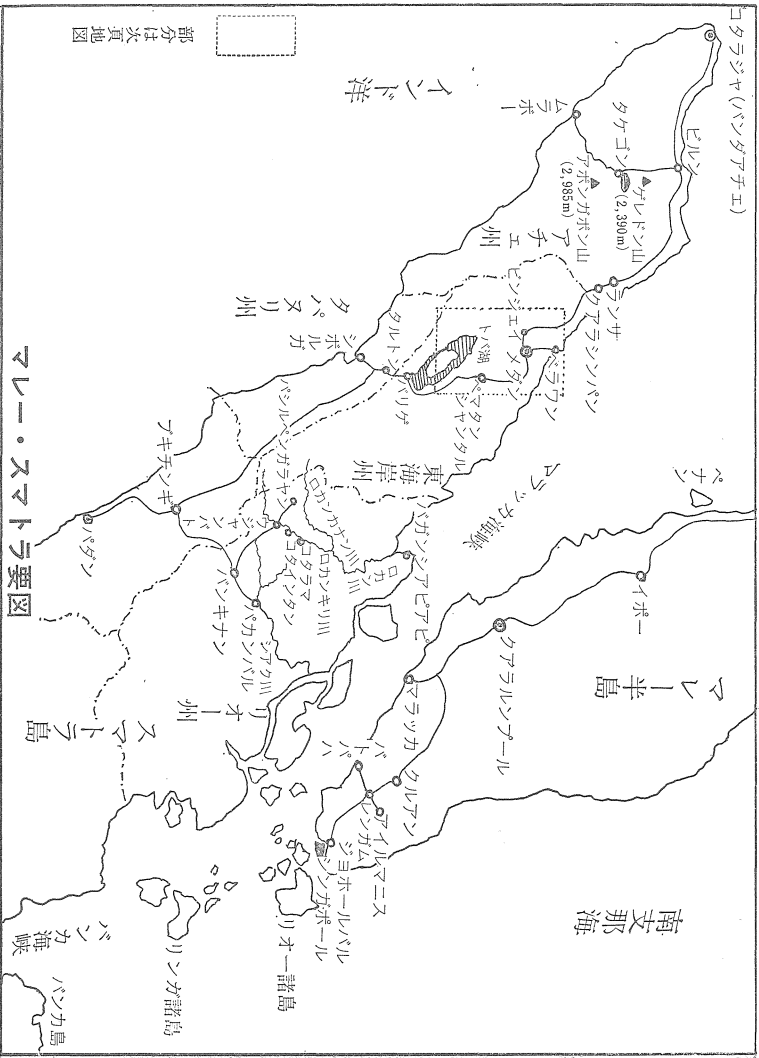
……三三

……三三

……三五

……三七

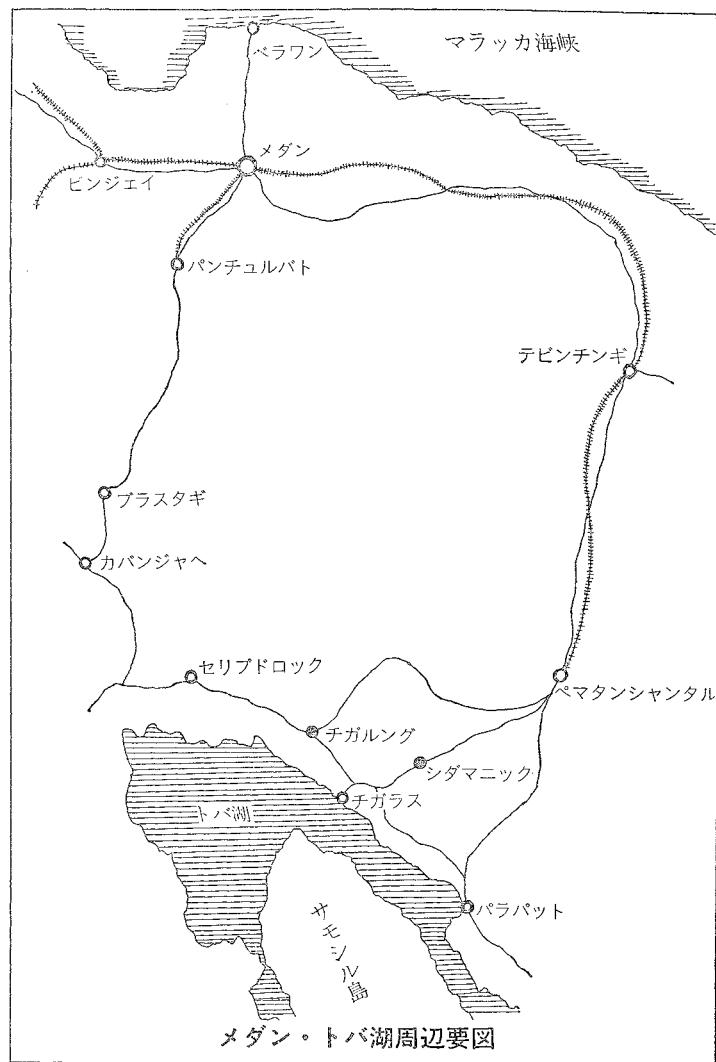
挿画・中村勇一



部分は次頁図

スマトラー要図

茨木機関潜行記



第一章 敗戦直前のシンガポール

航空から地上へ

私たち陸軍特別操縦見習士官三期、四期の南方要員約四百二十名が、昭南（シンガポール）占領後日本軍が改名）に再集結したのは、敗戦の日も間近い昭和二十年（一九四五年）六月初旬であった。

この特別操縦見習士官というのは、海軍の飛行予備学生に似た制度で、航空消耗戦の要請に答えるために設けられ、高等学校・専門学校卒業者、大学の卒業生、在学を対象とした。一期の入隊は昭和十八年十月一日である。三期は二期（昭和十九年二月入隊）と同じく、昭和十八年十二月一日に一般の部隊に入営した学徒動員組から転科したものが多く、また学窓から直接採用されたものもいた。入隊は昭和十九年六月一日、四期は全員学生から直接入ったもので、同年八月十五日の入隊であった。

この制度は結局四期で終りになったが、どうやら一通りの訓練を受けられたのは二期までで、三期は基本操縦課程を終えたのは一部にすぎず、四期はついに飛行機の操縦桿を握ることすらできなかった。

た。飛行機、ガンソリンの不足によるものだが、当初の計画の杜撰さも否定できない。一期、二期は特攻に駆り出されて多数の戦死者を出した。三期、四期はろくに飛行訓練を受けることもできず「約束が違う」と憤懣（ふんまん）やる方なかったが、お蔭で大部分が生き残った。

三期、四期の南方要員の大多数は、熊谷陸軍飛行学校や、その分校の軽井沢教育隊、野辺山教育隊で、グライダーの初級機、中級機による訓練を受けたのち、昭和十九年九月門司を出帆、同年末ようやく昭南に到着、昭和二十年一月からジャワの第一練習飛行隊（スラカルタ）、マレーの第二練習飛行隊（クランクアラルンプルの西約三十キロ）——いずれも第五十五航空師団隷下——に分かれて高等練習機による飛行訓練を受けた。しかし飛行時間は多いものでも二十時間程度で、三カ月もたぬうちに、全員地上部隊に転科させられてしまった。戦局がますます急迫し、飛行機の補給が追いつかず、練習機も特攻用に使用せざるを得なくなった。飛行機が不足すると操縦士は余ることになり、時間のかかる操縦士養成などはやっぴいられないというわけである。

ジャワ第一練習飛行隊のもの（私もその一員だった）は、ジャカルタから昭南（シンガポール）へ向かう途中、六月八日、便乗した重巡洋艦足柄がパンカ海峡で英潜水艦トレンチャントに撃沈され、数時間漂流のち駆逐艦神風が救助され昭南にたどり着いた。この足柄は帝国海軍の誇る一万トン級巡洋艦の一つで、実際は一万三千トンあり、二十センチ砲十門を装備、速力は駆逐艦なみの三十四ノットを出した。昭和十一年（一九三六年）、英国のジョージ六世の戴冠式に出席される秩父宮殿下や徳川夢声らを乗せて、はるばる英国（ポーツマス軍港）へ行ったことで国民に広く知られた。神風は一千二百七十トン、艦齡二十三年という老朽駆逐艦だが、戦後国府海軍に接収された有名な雪風と

もに生き残った数少ない強運の船である。

当時、昭南（シンガポール）の第十方面艦隊（福留繁中将）は、この二艦以外にはめぼしい軍艦がないというほどにやせ細っていた。輸送船は次々に撃沈され、ついに足柄も運送艦に成り下がりが、昭南―ジャカルタ間の陸兵輸送に従事していた。マレー、シンガポールの奪還を目ざすマウントバッテン海軍大将麾下の東南アジア連合軍の脅威をひしひしと感じた昭南の第七方面軍（板垣征四郎大将）が、防衛力強化のために豪州北方の島々に展開していた部隊を呼びよせていたからである。足柄は、ただ一隻の護衛艦神風が先行していたため単艦で北上中、白昼撃沈されたのである。帝国海軍の衰勢を、まさまざと示した事件であった。

このとき便乗の陸兵の数は一千六百四十九名であった（防衛庁戦史室『南西方面海軍作戦』記録による）が、戦死者は陸海合わせて約六百名〜一千名といわれる（正確な数字は不明）。その中で特操（特別操縦見習士官の略称）部隊は、驚くべきことに約二百名の中から、ただ一人の犠牲者（四期の加藤豊二愛知県）を出しただけだった。

昭南に先着して南兵営（ケッペル兵営）に入ったマレー第二練習飛行隊の特操は、すぐに據据りの使役にこき使われた。そのころは、昭南の防衛戦備が着々と進められ、猫の手も借りたいときであったが、見習士官がこういう使役に駆り出されるのは、ちょっと例がない。場所はシンガポール東部のカトンの山手で、兵隊と一緒に、階級章をつけたふんどし一つになってスコップをふるった。しかし見習士官にやらせるのは気の毒だと、四、五日で放免になった。

土方作業から解放されたマレー組も、海難にあって無一物となったジャワ組も、町へ出ては遊び回った。なにしろ「デタラメ」という定評のある特操である。遊び方は普通の幹部候補生よりも激しかった。この「デタラメ」というのは、軍人らしい節度、規律がないという意味の、一種の軍隊語である。とって特操が一般の幹部候補生に比べて、程度の悪い（これも軍隊語である）人間ばかり揃っていたというわけではない。しかし一般の部隊よりも上からの締め付けが少なかったこともあって、学生気質、地方人（一般社会人）気質が抜けなかった。おまけにたいいていの場合、指揮官がはず、自分たちだけで移動したので、行動は放縦に流れ、人目につきやすかった。危険な空中勤務を志願しただけに、向こう見ずで、やんちゃで、派手好きな人間が、他の部隊よりも多かったというこはいえぬかも知れない。

しかし何よりも私たちが放縦にしたのは、戦局の前途に対する絶望感、自分たちが今後何をするのか分からないという目標のなさからくる不安感、ろくに操縦訓練を受けられず、見習士官という階級を与えられながら待遇は兵隊なみという不満などが入りまじった不安定な気持だったと思われれる。おまけに南兵営の給養は極端に悪く、赤いバサバサの南方米の飯にカンコン（サツマイモの葉に似た野菜の一種）の汁、ときどき腐ったような塩干魚がつくぐらいで、空腹でも食欲の起さるものではなかった。前線のジャングルで、ろくに食うものもなく死闘を続けている友軍には申しわけない思いながら、食事のたびに皆ぶつぶついていた。町に出て旨いものを食いたいという欲求はおさえきれなかった。

しかし昭南は、私たちが話に聞いた占領初期のような、物資豊富な、活気のある明るい町ではなくなっていた。連合軍の巻き返りで、日本軍がじりじりと追いつめられている様子が、インドのニューデリー放送で毎日伝えられる。日本軍は、市民がその放送を聞くのを禁じていたが、ひそかに聞いているものから伝わり、市民はみな知っていた。

なにしろ三年以上も外部からの補給がなく、日本軍が駐屯して消費するばかりだから、店頭の物資は次第に少なくなり、値段は天井知らず吊り上がった。これには、抜け目のない華僑の物資隠匿、売り惜しみも見のがせない。町へ出た者は、アイスクリーム一個が十五円と聞いて仰天し、部隊内の配給では三十銭の煙草の興亜が、町では五十円でも買えないと聞いて呆れた。月給六十五円に戦地加俸がついて約八十円の収入では、町でろくに飲み食いもできない。

桜組（一般邦人のこと。胸に桜のマークをつけていたので、こう呼ばれた）の姿も、ひところのようには見られない。現地召集や徴用で引っぱられたのである。それでも黄色（将官）、赤色（佐官）、青色（尉官）の旗をつけた乗用車は、相変わらず町を走り回っていた。日本料亭の数は減っていたが、高級軍人軍属、商社員などの特権階級が入りびたり、噴火山上の舞踏を続けていた。

日本軍の後には料亭が従うといわれるくらいで、驚くほどの数の料亭が進出してきていた。これは昭南に限らず、南方占領地域の主要都市では、みなそうであった。もちろん戦前からのものもあったが、大多数は占領後に進出してきたものである。一番盛んなときは、東京から来た芸妓が昭南に二百人いたという。これらの料亭は、英国人の大邸宅や、甚だしいのは学校を接収して、日本から運んだ畳を入れていた。大山デブ子という喜劇女優が女将となっている料亭もあった。

南方軍総司令部が昭南に位置していた間は総司令官寺内寿一元帥は料亭へは行かなかったし、昭和二十年四月に第七方面軍司令官となった板垣征四郎大将も、かつて料亭に足を踏み入れたことはなかった。しかし部下の将校連の料亭通いはとどまらなかった。昭南には第七方面軍のほか、各級の司令部や軍政府があり、高級将校、軍属、邦人の数が多いから、自然、料亭も賑わう。料亭の繁栄は、日本軍の敗勢と関係がなかった。末期的症状の料亭の繁栄を見るに見かねて、方面軍参謀部第一課（作

戦）から、料亭をつぶせという強硬意見が出た。すると、民間の料亭を閉鎖するなら、軍の慰安所もやめてしまったらどうか、との反対意見が二課（情報）から出て、結局、沙汰やみとなった。

戦時中、昭南にいた在留邦人は、戦前から住んでいて、占領後復帰してきたものより、占領後初めてやってきたものの方が多かった。彼らは虎の威を借る狐で、家や工場をやたらに接収した。いわゆる一旗組の中の有力な連中は、軍の有力者（主として参謀）との個人的関係や手づるを利用し、軍御用達としてやってきた。彼らは陸軍省第六委員会（商社や一般邦人を戦地へ送り込む係）のお墨付をもらって来ていた。戦前からいた者で、戦争勃発直前に内地へ引き揚げたり、タイなどに避難していたものが、昭南に復帰しようとしても、手づるがなければ、むずかしかった。

これらに在留邦人も昭和二十年四月になると、昭南防衛のため現地召集で軍隊に引っぱられた。徴兵のがれに内地から逃げてきた連中も根こそぎとられた。女の子にまで銃をもたせて訓練が行われた。

夜になるとドンチャン騒ぎが行われている一方で、山の手に怪しい火光がきらめき、時にはノロシが上があった。ゲリラが潜水艦に連絡をとっているのだといわれた。追ったり刀で駆けつけても、ゲリラの影も形もない。なにしろ市民の大部分が敵性の中国系である。日本軍は表面だけは抑えているものの、裏面の世界には全く手が届かなかった。昭南防衛司令部では、雇っていた炊事夫がゲリラだったことが判明した。軍の指定食堂でも、終戦間際になると蔣介石の写真を張り出した。ベチャ（リンタク）曳きが、お客に路上で紙片を渡すなど情報交換をやっている。家の奥に伝書鳩を飼っていた例もある。中国のスパイらしいと尾行していった日本兵が、とたんに数人に取り囲まれて、半殺しの目があったという話も聞いた。市民が日本兵に向ける目は白くなっていた。

そういうことを見たり聞いたりしながらも、私たちは、よく外出した。ジャワ組は海難で軍刀をな

くした者が多く、服も兵隊服をもらったので、マレー組から軍服や軍刀を借りて外出した。中には一晩、二晩の無断外泊どころか、一週間も帰ってこないのがいた。なぜか二カ月分の給料を一本にくれたので、飲食遊興だけでなく、鱈皮の財布やベルト、あるいは腕時計などの買い物に精を出すものもある。ひどいになると、貨物廠へ行って海難を理由にトラック一台分の物資をせしめてきた。その中には英軍から鹵獲(ろかく)したコンデンス・ミルクなどもあった。ミルク以外の物資は闇で中国人に売り、その金を数人の仲間だけで分配した。

軍隊内の公定価格と、町の価格の差を利用して、カセイビル(昭南の中心部にある当時随一の高層ビル)の酒保で煙草や石鹼を買い、町で売る者もいた。

特操の行くところは、町の安い飲食店か、カセイビルの将校集会所ぐらいである。中国人が売っている「大東亜ウイスキー」という怪しげな酒を買ってきて飲む者もいる。日本料亭のような金の張るところへは行けない。

むろんピー屋(赤線)へも通った。はじめのうちは軍のピー屋へ行ったが、なにしろそこは兵隊が門前に行列しているありさまだ。すぐいやになり、穴場を探す。もちろんそういう場所は治安も悪く、病気の心配もある。

南兵営から六キロも離れたパシル・パンジャンのピー屋まで歩いて通うのがいた。帰りは、いつも夜中で、靴を脱いで、そっと入ってくる。

そのピー屋の親爺は宮崎県都城の人で、もと芝居の女形をしていたという。四十歳ぐらいで、女形とは信じられないごつい顔付だが、女のような声を出す。小さな家に中国人とマレー人の女が一人ずつ、やりて婆が一人いるだけだ。三人行くと女が一人足りない。すると親爺が私と寝なさいという。

さすがに親爺と寝たものはいなかった。

親爺は気前がよく、金を取らぬこともあり、時には飯をおごってくれる。そのあたりには、そうした小さなピー屋が三軒ぐらいあった。だが六キロも歩くといやになる。そこでトラックに便乗する。しかし、たいていのトラックは知らん顔で行ってしまった。

「ヘイタイさん。カキあるよ」と十歳ぐらいの中国人の子供が、一戸亮(青森県・早大)に呼びかけた。まっすぐに、こちらの顔を見上げていう。日本の子供のような恥じらいの表情は全くない。「カキ? アパ(何か)?」と聞き返しているうちに、その子はすっと寄ってきて、一戸の腰から図囊を外した。すばやい動作だった。予想もしなかったので、一戸はあわてた。子供は図囊を手持ってスタスタと歩いていく。図囊を人質にとられた形で、後について行くと、狭い露地に入った。家々がひしめき合い、二階の窓から突き出した棒に、おしめのような、色あせた洗濯物がひるがえっている。道には食べ物のカスや紙屑などが散らかり、悪臭がただよう。家々からのぞく中国人の目も気になる。子供は小さな家に入った。

三十すぎの女が出てきて、一戸に籐の椅子をすすめた。子供の母親らしい。椅子に腰かけて待っている。やがて母親がカキフライを作って持ってきた。ユズのような青い小さな実を半分に切ったものが添えてある。

家族は母親と男の子と十五、六歳の姉妹だけだという。姉妹はだんぶくろのようなズボンをはき、跣足である。母親を助けて甲斐甲斐しく働いている。父親は、と聞くと、日本軍に殺されたという。彼はぎくりとしたが、その子の顔には恨みがましい表情はない。母親も当たり前のような顔をしてい

る。彼らは恨みに思っていないのだろうか。彼は何とてよいか困った。気の毒だといいたいが、言葉を知らない。ただ「スサ・スサ」(悲しいとか、困るとかいう意味)とだけいった。

母親はうなずいている。彼は金を余分におき、立ち上がると、子供がこの次の休みはいつか、いつ外出するか、外で会おう、別のところへ案内する、などという。ませた口ぶりだった。この子が日本兵を案内して稼ぐ金が一家を支えているのか。その後、一戸は二度と、この子に逢わなかった。彼が昭南における中国人虐殺事件を知ったのは、終戦からずっと後のことである。

「ヘイタイさん、カネないか」といつて寄ってくるのがある。金を交換しようというのである。当時はジャワの方が物資が豊かなので、同じ日本軍の軍票でもルピア(ジャワ)の方が海峡ドル(マレー、シンガポール)よりも高く、一対一・二ぐらいの比率だった。

帰りには通る車をとめて便乗し、南兵営まで送ってもらう。邦人の車が多い。酔っぱらった特操の一人が軍刀を抜いて「生まれ！」とどなった。気がつくとき黄色い旗をつけているではないか。酔いもさめはてて青くなり、平あやまりにあやまった。車内の将官は、鷹揚に「いや、元気があってよろしい」といつて走り去った。

下級者の無軌道を咎めようもしない上級者のだらしなさ——それが下剋上の風潮を助長し、五・一五、二・二六など一連の事件を生んだ——は、ここにも現われていた。

怒れる特操

田口大輔(熊本県・長崎商専Ⅱ現長崎大学経済学部)らがカセイビルの階段を下りているとき、一

人の大尉が下から上がってきた。彼らは、そっぽを向いて行き過ぎようとした。するとなぜ「敬礼せぬ」とがめられた。軍隊では、これは当然のことである。幹部候補生出身の大尉らしく、三十五、六歳に見えた。中隊長のマークをつけている。相手が悪いと思つてあわてて敬礼したが、官姓名は、部隊は、などと聞きただす。説教しただけで、なぐりはしなかった。こちらの人数が多かったからかも知れない。

別のグループが町で軍曹と行き違ったことがあった。向こうは、そしらぬ顔で敬礼しようとしてもしない。一人が「おい、こら敬礼せんのか」とどなると、薄笑いを浮かべて「何ですか」と空っぽけている。メンコ(食器)の教ではこっちが上だ、軍隊に昨日今日入ったばかりのひよっ子の見習士官に敬礼などできるか、というわけだろう。

「何だと、貴様生意気な」と、一人が軍曹の胸倉をとった。ぞろぞろと特操の仲間が集まってきた。なぐれ、なぐれ、と四、五人で一発ずつ食らわせた。軍曹は、いつの間にか気を付けの姿勢になっていた。

これと同じようなことが特操の内部でも起こった。私たちの中には、内地で操縦の基本課程を終わって、遅れて南方へやってきた六十人の者がいた。彼らは六月十日付で少尉に任官していたが、早く南方にやってきた大多数の者には任官の通知がなかった。戦局の急迫で操縦教育が途中で中止されたからだろう。これは何も私たちの落度ではないが、軍隊には公平という言葉がない。一方的に教育未了にし、一方的に差別待遇をするのである。同期のもの間に階級の差ができる、当然に摩擦が起ころ。千村榮(埼玉県・中大)が、カセイビルでこの任官組の一人に行き合った。相手は少尉だから当然敬礼すべきだが、千村はしなかった。彼は他の者より三カ月早く、昭和十八年九月に入隊してい

る。同期の特操に敬礼する気など、全くなかった。すると向こうは「おい敬礼せんのか」と文句をつけてきた。

「敬礼せんかとは何だ。お前らは内地にいたからこそ早く任官しただけじゃないか。あんまりいばるな」

とやり返した。その場はそれで物別れとなったが、南兵営へ帰ってから問題が再燃した。敬礼しろといった男は、昭和十九年六月に学生から直接入ってきた男だと分かった（特操三期は、昭和十八年十二月一日に入隊し幹部候補生となったのち、翌十九年六月一日に特操に転じた者と、同日に学生から直接特操になった者があり、両者は同一に扱われたが、自然六カ月も軍隊歴の長い方がいばっていた）。それを聞いた周囲の者が千村よりもいきり立った。その男を呼び出してつるし上げた。その男は、とうとう泣き出してしまった。急を聞いて、任官組が飛んできた。だが任官していない組の方がずっと人数が多いので、押しがきかない。理屈よりも感情、星の数よりもメンコの数が勝った。任官組は仕方なく引き揚げた。任官していない組は、見習士官になってから一年余も、そのまま放っておかれている。鬱屈した感情が、こういうときに爆発するのもやむを得なかった。

浜中董（和歌山県・中大）は中肉中背で、むしろ細身の方だが、いつも睨みつけるような目をしている。紀州の産で漁師のような胸間声だ。肩を怒らして歩く。でたらめもやるが親分肌で、つねに教人の取巻きを従えていた。

仲間と町を歩いていると、向こうから同じように肩を怒らした見習士官がやってきた。薄汚れた兵隊服に、鉄鎖の刀帯を締め、真っ黒になった革脚絆（きゃはん）をつけている。日焼けした頬がこけ、

目付が鋭い。煮しめたようなその風貌には殺気のようなものが感じられる。特操ではなく、普通の兵科の見習士官である。一人で、こちら数名をじろりと睨んで通りすぎようとした。浜中と目と目が合い、火花が散った。

「おい」

浜中が一步を踏み出した。どちらからともなく近づいた。互いに肩をそびやかし、胸がふれ合わねばかりになった。浜中が顎をしゃくった。

「ふん、何やら面白そうなお方やな」

「何をッ。何だ、貴様あ」

「何だとは何じゃ。こっちは天下の特操様よ。飛行機乗りの特操じゃ、知らんのか」

「馬鹿もん。飛行機乗りがどうした。俺はビルマ帰りだぞ」

「なんやと。ビルマがどうしたんじゃ。わしらはな、日本最古の見習士官やぞ。ちったあ尊敬せい。欠礼すると許さへんぞ！」

相手はフフンと冷笑を浮かべた。

「やるかッ！」

浜中は腰から軍刀と函囊（すのう）を外し、後ろ手に仲間に渡した。相手も同じく軍刀と函囊を外し後ろに投げ捨てた。

たちまちなぐりあい、取っ組み合いが始まった。二人は地上に放り出された軍刀を踏みそうになり、他の者があわてて軍刀と函囊を拾い上げた。

二人は組み合ったまま路上を駆け回った。いつの間にか中国人やマレー人が回りにたかっている。

「やめろ！ もういいだろう」

仲間が二人を引き離した。浜中は小びんをすりむいていた。荒い息を吐きながら起き上がると、
「さすがビルマ帰りや。骨がある。恐れ入ったわい」

と苦笑いした。ビルマ帰りは、怒ったような表情を崩さず、軍刀と凶囊を受け取った。

彼は遺骨宰領のため、ビルマの最前線から帰ってきたのだといった。それを聞いて、浜中は「いや
お見せしました」といった。回りの者がどっと笑った。

私自身は町へ出て、あまり飲み食いした記憶がない。ひとつには、前年の暮に初めて昭南に着いた
とき腸チブスで南方第一陸軍病院に入院して以来、経口伝染病に神経質になり、食べ物に気をつけて
いたためである。記憶に残っているのは、出田（いでた）慎次郎と外出したときのこと、知人の先輩
を訪ねたときのことぐらいである。

出田も私も熊本県出身で高校（五高）、大学（京大）も同じだが、彼は私の四年後輩だった。入隊し
たのも同じ西部十六部隊（歩兵第十三連隊・熊本）だが、知り合ったのは熊谷陸軍飛行学校軽井沢教
育隊に入ってからだった（特操三期は大学に入っただけで軍隊にとられた二十二歳ぐらいのものが
多く、当時すでに二十六歳になっていた私や千村榮、岩永達之助、東京都・専大、などは変わり種の
ロートル組に属した。なぜか特操には年齢の制限がなかったので私たちのような年の多い者も、とき
どき混っており、まれには三十歳を越えたものもいた。私は昭和十六年十二月に卒業し、二年間会社
勤めをしたのも召集を受け、学徒動員組と同時に入隊し、特操に転じたのである）。

出田は中肉中背、色白で頬がうっすらと赤く、少年のおもかげを残していた。歌がうまいという評

判だったが、私は聞いたことがなかった。彼は、その風貌からか、中年女性にもてたようだ。台湾の
高雄にいたとき、彼は郊外の鳳山にある仙台出身の佐々木さんという家に入入りするようになり、私
を二度連れて行ったことがある。そのとき細面の美しい奥さんが、彼を自分の子供のように可愛く思
っていることが、言葉のしほしほに読みとれた。

昭南で出田が私を連れて行ったのは、バーのような、喫茶店のような店で、そのマダムは日本人
だった。オランダ人と結婚していたという五十歳近い顔立の整った人だった。二人はカウンターに腰
かけてコーヒーを飲みながら、小母さんが、現地人とマレー語で話をするのを、うまいなあと聞きほ
れていた。「ブカン」（否定の言葉）といったのが、いつまでも私の耳に残り、その言葉をおぼえてし
まった。この人は、おそらく娘子軍の一人だったのだろう。

外に出ると、どちらからともなく「日本人の女が外国人にやられるのは面白くないな」といった。

カセイビルにある日本放送協会の昭南放送局に長山松比古氏を訪ねたことがある。放送局長はスポ
ーツ放送で有名な河西三省氏だった。長山さんとは、私が大阪で勤めていたとき、仕事の関係で知り
合ったのである。前にも私が病院を退院してジャワへ行くとき、一度訪問したことがあった。その私
が半年たらずで、しかも民間人の格好で舞い戻ってきたので、長山さんは驚いた顔をした。事務室の
中は長山さん以外は現地人ばかりである。その中の一人、メガネをかけた上品な顔立ちのユーラシア
ン（欧亚混血児）の女性が、私を見て意味ありげに笑い、隣の男に何かいった。それにつれて他の男
たちもにやにやした。一体どういうわけですか、と聞く

「ラクト・ペビーが、またやってきた、といってるんだよ。彼女が君につけた渾名（あだ名）だ」

と、長山さんも笑っている。ラクトーゲンという煉乳か粉乳かのレットルに出ている赤ん坊の顔に

似ているというので、私のことをラクト・ベビーと呼んでいるらしい。

彼女は、笑いながら私に「その頭はどうしたんですか」と、聞いた。そのころ私たちは、髪を伸ばしかけていた。情報勤務に服するという話から、坊主頭では具合が悪いという理由で、皆喜んで伸ばし始めたのである。私は「床屋へ行く金がないからだ」と下手ないいわけをした。相手は当然変に思ったに違いない。長山さんには、わけを話した。飛行訓練が中止されたことを聞いた長山さんは、少し深刻な顔になった。

多数の特操が、だらしなく営門を出入するので、軍紀、風紀の維持上、好ましくないと特操は足止めを食った。だが、齒科治療やその他の口実を設けて外出するものが跡をたたない。未任官組の中には、俺たちは、もう任官しているはずだと少尉の階級章をカセイビルの酒保で買い、堂々と少尉になって出るのがいる。

B 29の爆撃があり、南兵営にも一発落ちた。五十メートル位しか離れていない地面に、大穴があいた。退避もせずに四階でマージャンをやっていた連中が、あわてて卓をひっくり返して逃げた。他の部隊では負傷者が数名出たが、死んだものはなかった。

町の中にも爆弾が落ちた。路上に転がった死体に群衆がむらがり、時計や財布などを奪い取った。

特務機関に転用

私たちの大部分は六月一日付で航空兵から歩兵に転科し、同十五日付で第五十五航空師団から第七

方面軍参謀部付となっていた(一部、通信など他の兵科に転じたものもいた)。そして近く情報関係の任務につくらしいとの噂が伝わっていた。私たちはそれを歓迎した。ぶらぶら遊んでいるのは結構なようだが、目標がないのは不安であった。

その情報関係の仕事とは、特務機関だということが分かった。特務機関とはスパイのようなことをするのだろう、ということぐらいしか、私たちは知らなかった。正体が分からないのが、かえって魅力でもあった。それに私服で気ままに歩き回れるのがいい。軍服のタガをはめられていると、休みにも、のびのびとした解放感味わえない。自由な市民の生活に入れるのがありがたい。そして縦横の活躍ができるのだったら、これに越したことはない。頭に浮かぶのは、日露戦争直前のスパイ活動で捕えられて死んだ沖、横川両志士や、ロシアの後方かくらんに大きな働きをした明石元二郎大佐、または第一次大戦で活躍したドイツの女スパイ・マタハリといった人物であった。

特操を情報勤務に転用するという案は、方面軍の参謀連中の酒の席で出たのだという。何ともいい加減なものだが、庶民の運命というものは、権力者の些細な、気まぐれな思いつきから、方向が大きく変えられる場合が、少なくないようだ。それで大した被害がなければまだしも、悲惨な結果に終わる場合、救われないのは庶民の側である。

間もなく方面軍参謀部二課から桑原長中佐参謀(陸士四十三期)がやってきた。四十歳ぐらいか、背が低く太っており、眼鏡をかけていた。半袖に白ズボンという民間人の服装である。彼は情報将校の心得を説いた。話がうまいわけではないが、私は頭のよい人だな、と思った。軍隊に入って、職業軍人の頭のよさに感心したのは、この人が初めてであった。

桑原中佐は「人物がしっかりしていれば、相手が惚れてくるもんだ。そうなれば情報がとれる。女

でも同じだ。女は男の人物に惚れるのだ」といった。私はなるほどと、その言葉を肝に銘じたが、その説はどうも怪しいと思ったのは、大分後のことである。

「しかし」と桑原中佐は続けていった。「お前たちが軍隊から出て、地方人の中へ入ったら、いやでも女が目につくだろう。感激がやがて恋となり、それがいつかは実を結ぶ——ということになっては困る。そういうことは、お前たちには許されんのだ」

つまり女を好きになっても、恋愛してはいかんぞ、というのである。彼は敵側の将校に惚れ、秘密をもらしたというマタハリの例をあげ、仕事には女を使うな、女には秘密をもらすな、女は男に惚れたら平気で味方を裏切るのだ、女を使ったら死ぬようになるぞ、ことわざにも「七人の子はなすとも女に心許すな」というではないか、と力説した。女に対し甘い幻想をいだいていた私たちは一様にがっかりした。でも、あれほどいうのだから間違いはあるまいと思った。

中佐は、次にインパールの敗戦の話をした。日本軍の敗戦の一つの原因は、カーサ地区に敵の空挺隊が下り、背後をおびやかされたことにある。それを誘導したのは、敵側の諜者だった。彼らは医者や教師などインテリの連中だった。

彼はさらに、ビルマで日本軍と共に戦ったインド国民軍の一人の手記に「日本軍は婦女子を残して逃げた」と書いてあったとして、これは日本軍の恥だ、どんなに苦しくなっても、卑怯な見苦しいマネはするな、と戒めた（これは、どこで起こったことを指しているのか分らないが、ビルマ方面軍司令官木村兵太郎中将の間もなく大将に進級したが、昭和二十年四月二十三日、邦人、婦女子を放ったらかして、真っ先にラングーンを脱出したのは事実らしい。これに反して、インド国民軍総司令官チャンドラ・ボースは、四月二十七日の朝、「婦人部隊の最後の兵がシッター川を渡り終わるまで

は渡らない」といって河畔に突っ立って撤退を見届けていたのを、当時ラングーン総領事館勤務の田村太郎氏が目撃している（同氏著『ビルマ脱出記』図書出版社刊）。

私は諜者の話よりも、その話の方が印象が深く、いつまでも忘れなかった。口では皇軍だの何だのといひながら、本当は没義道な軍隊ではないのか、と情ない気がした。

その翌日、変な人物が現われた。背は五尺そこそこで、白の上衣に黒のスカートという組合せの中国服を着、回教徒のかぶる黒いペチ（トルコ帽）を頭にのせ、色眼鏡をかけている。その奥の目はくぼんで小さい。髪はポマードでべったりとなでつけ、傍によると強い匂いがする。けったいな格好ではあるが、骨っぽい顔にはきかん気があふれ、大手を振って歩く姿はただ者ではないと思われた。

これが茨木機関の機関長茨木誠一少佐だった。茨木機関（正式の名前は岡機関）というのは、方面軍参謀部二課に所属する特務機関の一つである。茨木少佐と一緒に安達孝、近藤次男の両大尉もやってきた。二人は白の半袖に白いズボンという昭南の一般民間人の服装だった。近藤大尉は眼鏡をかけた一見会社員風で、安達大尉は均整のとれた逞しい体をしていた。三人とも陸士出ではなく幹部候補生出身である。特務機関員の養成所である中野学校では、主として幹候出や下士官を訓練養成した。

私は茨木少佐が、なぜ中国服を着てきたのか不審に思った。昭南の市民は大部分が中国系だが、中国服を着ているのは、よっぽどの老人でもなければ見たことがなかった。それなのに、なぜ人目に立つような格好をするのか、それがふしぎだった。

おそらく、これは彼の示威行動にすぎなかったのであろう。特務機関員はこんなにごいんだぞ、と見せびらかしたかったのである。飛行帽、飛行服に半長靴で町を歩くようなものである。つまり彼の稚気の現われであった。

口を開くと、朴訥な茨城弁が出てきた。期待していたスマートさは全くなかった。何だこんなものか、とがっかりしたが、彼は案外話上手だった。

「……この昭南にも敵の諜者が潜んでいる。主として中国の重慶政府の諜者で、一グループ四、五人から成り、その中には必ず女が入っている。米ビツの中に無線機を入れたり、屋根裏に屋根の傾斜に沿ってアンテナを張ったりしている。インドのニューデリーから、彼らに対し一週間に一回、五十分ぐらいの間、指令が出る。それはニュース放送の中に especially とか、particularly などの言葉が、おかしなアクセントで何回か出てくる。それに番号を打って数字を操作すると指令になる。」

阿波丸が撃沈された事件にもスパイが暗躍した形跡がある（米国の要請で、南方諸地域の連合軍捕虜、抑留者に対し、食糧、衣類などの救恤品八百トンを送ってきた阿波丸Ⅱ一、二四九トン、日本郵船所屬Ⅱは、日本への帰途、昭和二十年四月一日夜半、台湾海峡で米潜水艦に撃沈された。乗船していた軍関係要員、技術者、一般邦人、船員など計二千名余のなかで、助かったのはコック一人という大惨事になった）。

この阿波丸が昭南に寄港し、日本へ帰ろうというとき、その積荷を調べて知らせよという指令がニューデリーから送られてきた。スマトラの日本軍憲兵隊が、それを解読して阿波丸の出港を見合わせるよう勧告してきた。しかし、それを無視して出港し、撃沈されてしまった。阿波丸に起重機で荷物を積み込むとき、赤十字のマークの入った箱が落ちてこわれ、中からモリブデンの鉱石などがこぼれたことがあった。これはビルマから飛行機で運んできた戦略物資である。おそらく人夫の中にスパイが入っていて、内容を知るために、わざと落としたのである。それで戦略物資を積んでいることが分かったために、阿波丸は撃沈されたのだと思われる（この阿波丸は連合国から航行の安全を保証され

ていたにもかかわらず、撃沈されたのである。つまり連合国から安導券——航海の安全保証状——が与えられ、船体に緑十字を描き、夜間は照明で、これを浮き上がらせていた。撃沈した潜水艦長は、夜間と霧のため駆逐艦と誤認したというが、信じられない。日本政府の抗議に対し、米国政府は、同年六月末、ようやく「阿波丸は安導券に関する取り決めの条件に従っていたと認められるので、米国政府は同船を撃沈した責任を認める。潜水艦長に対しては懲戒処分の手続中である」「公正に賠償問題を審議する用意がある」と全面的に責任を認めた。日本政府は二億二千七百二十八万円の賠償金の支払いと、代替船の提供を求めているが、米側から確たる返事もないうちに、昭和二十四年四月、第五国会は、戦後米国が日本に与えた経済援助を多とし、阿波丸に関する賠償請求権を放棄する旨決議し、日米間にこの旨の協定が調印された。——この項は『日本外交史』No.二四Ⅱ鹿島研究所出版協会による）。

自分は南方に来る前は、南支の特務機関にいたが、マカオで援蔣物資（連合国から蔣介石政権に送られてきた援助物資）の爆破に成功した。

そのために自分の首に二十万テールの懸賞金がかけられたことがある。

重慶側の要人を殺すために、毒マンジュウを贈った。ところが使いの中国人が、それを食べて死んでしまった。要するに、なかなかうまくいかんということだ。われわれの任務は本や雑誌に書かれるような派手なものではなく、苦勞や危険が多く、報われることは少ないのだ……」

そして彼は、特操に与えられる任務は、いわゆるスパイ活動よりもゲリラ活動だといった。敵が進攻してきたとき、その地区に居残り、残置諜者となってゲリラ戦をやるのだ。そのためには現地語と無線の操作に習熟しなければならぬ、という。

安達大尉と近藤大尉は、もっぱら彼らが在勤したところ——北部スマトラとアチェ州（スマトラ北端）の話をした。日本軍がスマトラへ進攻したとき、F機関（藤原機関）のアチェ人たちが先行して大いに協力したことや、アチェ州民はインドネシア人の中でも最も頑強で、オランダに最後まで抵抗した。武器がなくなると、ドリアン（回りに突起のある果物）まで投げて戦った……。

講話が終わると紙が配られた。身上書を書け、勤務地の希望も書けといわれた。

その翌日から安達、近藤の両大尉が一人一人面接し、身上書を見ながら口頭試問をした。マレー語や英語で話しかけたりした。私は試験官の英語があまりうまくないので気が楽だった。神代正夫（富山県・台北帝大）がスマトラへ行きたいというと、その理由を聞かれた。彼は石油生産地であるパレンバンを押えられたら、昭南はお手あげになる。パレンバンはどうしても守り通さねばならぬ。だから行きたい——と答えると、安達大尉は大いに感心し、今迄お前のように的確に理由を述べたものはいなかった、とほめた。神代は、とっさに思いつきをいっただけで、腹の中では舌を出していた。

小松隆（長野県・上田蚕糸Ⅱ現信州大繊維学部）はTNTの構造式を聞かれた。それから大東亜戦争は勝つか負けるかと質問された。彼は勝つとも負けるともいわず「米軍のM4戦車には速射砲が通じない。精神力だけで勝とうといっても無理だ」と答えると、よし、お前には教育の必要なし、といわれた。

三十名ばかりが口答試問が終わると一休みになった。安達大尉が部屋から出てきて、汗をふきながら、順番を待っている連中に、

「暑いなあ。お前ら学校出たんだから試験しても同じだ」
 といった笑った。

中島節也（東京都・早大）は希望の任地を書くとき仲間と相談した。米軍は日本へやってくるだろう。英軍はビルマからタイへ攻めてくるだろう。最後に残るのは仏印（フランス領インドシナ、つまり現在のベトナム、カンボジア、ラオス）に違いない。仏印なら中国へも逃げられる。そう思って、第一志望を仏印、第二志望をタイとした。

タイや仏印を志望したものの中には、ジャワやスマトラのような島ならば逃げ場がないから、と計算したものが多かった。私は希望地は書かなかった。どこが安全だか危険だか予測できるものではないと思った。また向こうが勝手に決めるのだから、クジを引くようなもので、何が当たるか楽しみだという気持もあった。

六月二十五日に、それぞれの行先が発表された。私（筆者）は茨木機関に配属された。第七方面軍参謀部二課に割り当てられた約四十名は全員茨木機関配属となった。

出田慎次郎は仏印・サイゴンの総軍司令部参謀部付に発令された。南兵營の特操約四百二十名が総軍、第三十八軍（ハノイ）、第七方面軍（昭南）、第三九軍（バンコク）、第二九軍（マレー）、第十六軍（ジャワ）、第二五軍（スマトラ）にそれぞれ四、五十名ずつ配属された。これらはすべて各軍の参謀部二課（情報）付となるのである。

中島節也は家が日蓮宗のお寺のためか、仏教国のタイ行きと決まった。タイ行き四十七名のうち十一名が僧侶の子弟だった。

総軍付は、直接サイゴンの総軍へ赴任するものと、昭南で教育を受けるものとに分かれた。昭南に残るものは、総軍付とは名ばかりで、主として敵がマレー半島に上陸した際のゲリラ戦士、特殊永久

謀者に使用する含みであったらしい。彼ら約八十名はトラックに乗せられて南兵營を出た。

運転席にはペチをかぶった、やせた若い男が坐っていた。助手席に乗り込んだ島崎好人（佐賀県・興亜専門Ⅱ現亜細亞大）が、「マナ。ビギ？」（どこへ行くのか）と聞くと、彼は前を向いたまま怒ったように「私じゃ日本人ですよ」といった。後で聞くと茨木機関の上等兵とのことだった。

トラックはオーチャード・ロードから総督官邸とは反対の左側に入り、坂をぐるぐると上がり、丘の上の、テニスコートのある大きな邸の前に止まった。インスチチューション・ヒルという場所だった。いずれ相当な身分の英国人の家だったのだろう。茨木機関の安達、近藤の両大尉が乗用車で後からついてきて、マレー語班と中国語班に組分けして、すぐ帰っていった。

まちまちな布地の半袖シャツ、長ズボンが各人に支給された。髪も伸ばすことになった。出田や島崎、鈴木邦治（東京都・東京商大Ⅱ現一橋大）らはマレー語班に、日高操（長崎県）、関屋重政（宮崎県）ら東亜同文書院出のもの、村山馨（東京都・明大）などは中国語班になった。

彼らの身の回りの世話をする下士官の話では、ここは重慶向けの謀略放送の基地だったという。女を含む三名の中国スパイが、無線で重慶へ情報を流していたのを捕え、そのまま逆用して、偽の情報を送らせていたのである。

下の谷間Ⅱリ、ババレーで白人の捕虜が作業をしているのが見えた。五、六十人が防空壕掘りをやっている。動作は緩慢だった。この坂のすぐ下に茨木機関の本部があるとのことだった。

翌日から教育が始まった。課目は語学、通信、爆薬の扱い方などである。中国語班では五十歳ぐらいの中国人が広東語を、二十七、八歳の女が福建語を教えた。その女性の父親は、大世界（歓楽街）に店を出しているパン屋だそう。美しいが険のある顔立ちで折れそうなほどの細い腰をしている。

その細腰に強調されたお尻の張り出しが、講習生の熱い視線を浴びた。彼らの中でも、同文書院出の連中は、さすがに上達が早かった。彼らは町へ出ると、中国人の店に寄って、広東語と福建語の会話の練習をした。

マレー語班の教師は二人とも女だった。十八歳ぐらいのマリアムは、日本語学校へ行ったことがあるので、片言の日本語が話せた。はきはきした娘だった。もう一人のサルビアは、二十七、八歳で、ちょっと色っぽい。彼らは授業中、ときどきサルビアを冷かした。

通信を教えるのは、民間人のような感じの曹長だった。小太りで、タヌキみたいな顔をしていた。桑原参謀や、その他の参謀が時々来ては話をした。日ごろサボっている連中も、参謀が来ると、仕方なく出席した。一緒に昼食をとりながら話をすることもあった。その時には、食事の内容がよくなかった。そうでない日の食事は、マレー語班では、おかずがカンコンの塩汁だけのこともあり、南兵營よりも質が落ちた。中国語班は、いくぶんましだった。食事は両班別々につくるのである。しかしマレー語班は、先生が二人とも魅力的な女性だから、おあいこだろう、ということになった。

参謀部二課長の吉田長秋大佐（三十六期）は「日本は勝てるか」とか「日本に飛行機は何機あると思うか」などと聞いた。普通の部隊では、上官が部下に、こんな質問をすることはない。彼らは、やはり情報参謀は違うんだな、とその卒直さに驚きと魅力を感じたが「勝つと思います」とか「敵に反攻するだけの機数はあると思います」などと当りさわりのない返事をした。負けるとは思わない者もいたが、大部分は負けるにしても大分先のことだろうと思っていた。それから二カ月たらずで手をあげようとは、だれも想像できなかった。

桑原中佐は、もっとびっくりするようなことをいった。「もう先は長くないぞ」と日本の敗戦を暗示

し、早く各地に展開しろ、カンボン（村落）に入りこめ、日本軍が巻き返しに出たとき立ち上げ、といった。

茨木機関の茨木少佐は、何かのついでに「三十年後に日本は必ずまたやってくる。お前たちが働くのはそのときだ」「自分ができなければ子供に、孫にやらせるんだ」といったことがあった。彼の話は、もちろん敗戦を前提にしている。しかし、それよりも子供に、孫に、という言葉に出田は衝撃を受けた。そんなことができるとは思えない。三十年先のことなど考えられもしないし、そんなに長い間「堅確なる意志」を持ち続けることができるだろうか。しかも頭がぼーっとなりそうなこの酷熱の異郷で。さらに自分にはできても、子供や孫がそれを受け継いでくれるだろうか。彼らはもはや大日本帝国の臣民ではないのだから。

——これは途方もない残酷な任務だ。

そう思うと気が重くなった。彼らは特永謀（特殊永久謀者）第何号と番号がつけられていた。しかし彼ら同士が番号で呼び合うことはなかった。そこまでは徹底しきれなかった。まだまだ素人なのだ。

課業は午前中だけで、後は何をしてもよかった。外泊も自由である。それをよいことに遊ぶのも勉強のうちとばかり、課業が終わると、あるいは夕方になると、ぞろぞろと山を下りた（この訓練所は「ヤマ」と呼ばれていた）。

行先は南天酒楼や南国園というレストランのあるカセイビルか、大世界、新世界の歓楽街、あるいはピー屋などだった。サルビアの父親にピー屋へ連れていってもらったのもいた。その父親は、日本軍のスパイをつとめているという話だった。

物資をヤミに流して遊興費をかせぐのは相変わらず盛んだった。やがて金がなくなると、軍服を中国人に、軍刀を日本人に売ったりした（そのころ在留邦人は例外なく召集されたり、あるいは自警団を組織していたりしたので、軍刀をほしがる者が少なくなかった）。

カセイビルの将校集会所には、よく昼飯を食いに行ったが、群をなして、たびたび来るので、あまりいい顔をされなくなった。また彼らの方でも私服に伸びかけのザングリ頭では目立つので、遠慮するようになった。

伝手（つて）を求めて日本料亭へ行くのもいた。といっても正面から行ける身分ではない。女将と知り合いになり、あんどん部屋のようなところへ、五、六人が潜り込んだ。もっともらしく通信機を運び込み、押入に隠したりする。通信の練習は、どこでやってもいいということになっていた。しかし女中たちに、金のない居候だが、実は重要な任務についているのだ、とそれとなく知らせたいのである。現地にとけ込もうとか、南方の土になろうという人間が、日本料亭に入りこんでいるのは、どう考えても理屈に合わなかった。

島崎が金に困って安達大尉に何とかして下さいと嘆願すると、安達大尉は頭のとっぺんから足のつま先までじろじろとみつま。

「お前ら、自分でかせげ。いいか、自分のことは自分でやるんだ。かっぱらいでも強盗でもいいんだぞ」

と、にやにやしながら答えた。

そばで聞いていた出田は、乱暴なことをいう、これがここの道徳なのか——いやそうではあるまい、つまりどんな手段を講じてでも自分だけの力で生き抜いてゆく方法を身につかせようというのだらう——彼はそう解釈した。ほとんど目のさめる思いがした。

彼は入隊以来、学生時代とは全く異質の考え方にぶつかり驚くことが多かった。たいていの者はそれを嫌悪し、軽蔑するのだが、彼は逆に、反発するよりは、そのよい点をみつけて感心した。こういう行き方もあるのだな、と思う。軍隊向きではない、線の細い出田が逆に軍隊に心酔して一生懸命、それに合わせようとするのは、悲壯を通り越して、滑稽ですらあった。

彼は語学の才能があったらしく、マレー語班の中で最も進歩がめざましかった。若い教師のマリアムと親しくなり、仲間から冷かされることもしばしばだった。

数人で唐手の練習をしているところに、安達大尉がやってきて、「お前ら、人を殺したことがあるか」と聞いた。おれは殺したことがあるぞ、といったげな顔付だ。やくぎの世界では、人を殺傷して刑務所入りをすれば、箱がついて仲間うちで威張れるように、軍隊では、戦闘経験のあるものが威張る。彼らは今さらのように若輩であることを痛感し「いいえ、ありません」と答えた。

安達大尉はフンといった顔をして、

「イギリス人の捕虜でスパイをやったことが、ばれたのがある。いずれは死刑だ。だから、お前ら、その首を斬ってみろ」

という。彼らは顔を見合わせた。——こりゃえらいことだ。

弱虫といわれそうだが、やります、とはいえない。口ごもっている。

「こわいんだろ、お前ら」と、安達大尉は、にやりとして行ってしまった。

あとで近藤大尉に聞くと「あれは中止になった」と事もなげにいった。ほっとした。そして安達大尉は、おれたちの肝試しをしたのかなと思った。

彼らは上半身裸の捕虜たちが、隊伍を組んで歩いたり、作業している姿を思い浮かべた。英会話の練習にも思って、豪州軍の捕虜に話しかけた者もいた。すると、その捕虜は、たったこれだけしか飯をくれない、といって、手で水をすくうような格好をしてみせた。

捕虜はみな赤く日焼けし、やせていた。互いに相戦っているときならともかく、抵抗できない者を斬るなど、とてもできないことだ。彼らは捕虜を見るたびに気の毒でもあり、薄気味悪くも感じた。敵が上陸したら、彼らは一斉に反抗するだろう。

島崎は八月十五日に展開せよとの内命を受けた。ポート・ダーウィンに潜入せよという。短波無線は、五百キロぐらい届くので、そこから日本軍の前線へ情報を送るのである。

三上重次郎（広島県・拓大）らはボルネオで敵の後方攪乱を命ぜられた。彼らには宣撫用のカイン（布地）、金がなくなったとき中国人に売るための阿片、罐詰、ピストルなどが支給され始めた。

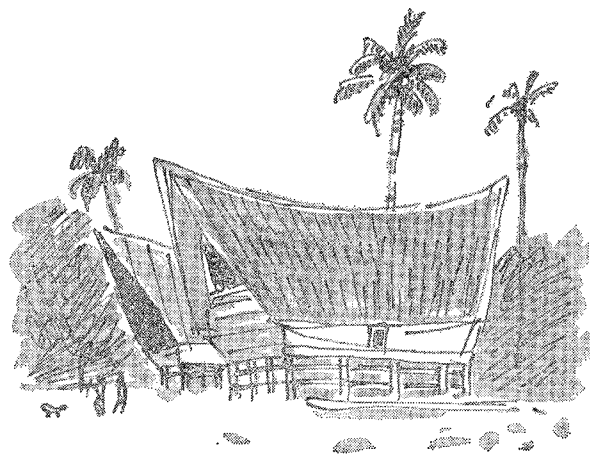
通信を教える曹長が、宿舎に女を引っぱり込むようになった。彼は中国に長くいたので中国語がうまかった。賭博の名人で、ポーカーやマージャン、オイチョカブなどをやると、例外なしに誰でも彼に巻き上げられた。

そうした中で是恒という男が突然にいなくなった。数日後にブキテマのゴム林で首吊りをしているのが発見された。体格のいい、無口な男だった。なぜ自殺したのか、だれも心当りがなかった。

参謀たちが、ほとんど来なくなった。終戦の数日前のことだった。

町に出たものは、一様に中国人の白い目を感じた。異様なふんいきである。ほとんどの店が戸を閉

めて休んでいる。日本の降伏に伴う社会的、経済的変動を警戒してのことだった。一方、銀行の前は黒山の人だかりである。日本軍の軍票の価値がなくなるのを見越して預金を引き出し、貴金屬に代えているという。軍票の値打はどんどん下がり、ついには軍票では物を売ってくれなくなった。それとともに海峡ドルが町にチラホラと現われ始めた。



第二章 諜報戦の日々

茨木機関の面々

「ヤマ」の教育隊があるインスチテューション・ヒルトリババレー・ロードをへだてて向かい合ったあたりに二階建の大きな住宅があった。母屋とは別に入口に小さな家があり、国際運輸昭南事務所の看板がかかっている。五、六人の事務員が机に向かってるのが、窓越しに見えた。裏庭にはバドミントンのコートがあって、昼休みには、きまって風を切るラケットの音や、掛け声が聞こえた。何の変哲もない小さな会社の事務所兼住宅とみえるが、これが茨木機関の本部だった。

隊長の茨木少佐は、日中事変のころ、広東の特務機関にいたが、昭和十七年の中ごろ、昭南の南方軍総司令部に転属してきた。階級は大尉だった。参謀部二課付属の調査室を強化するために、茨木大尉や、吉永正弘大尉などの中野学校出（いずれも幹部候補生学生の一期生）が集められたのである。

調査室は二十名ぐらいの規模で、連合国の放送や軍通信の傍受、暗号解読や、敵の諜者の逆用による偽情報の発信といった、いわゆる文書諜報をやっていた。

別に分室があり、残置謀者を探索したり、治安情報を収集したりする実働面の仕事を担当していた。茨木、吉永両大尉は、この分室に所属していた。茨木大尉は総軍参謀部二課付であると同時に、スマトラへ移った第二十五軍の参謀部二課付も兼務していた。パレンバン政庁の特高主任当時、憲兵隊と協力して、スマトラにいたオランダ残置謀者を一掃する仕事で手柄を立てた。仕事ぶりは、かなり荒っぽかったが、果断で実行力があり、第一線の活動には打ってつけの人物であった。

彼につづいて安達、近藤の両大尉（中野学校三期）が、分室勤務となってスマトラから転勤してきた。二人は茨木大尉と同様に総軍、第二十五軍の参謀部二課付を兼務し、同時に、それぞれスマトラの東海岸州、アチエ州の各軍政部警務科特高主任を勤めていたものだった。

茨木機関は、茨木、安達、近藤の三人が分室から分離独立し、昭和十九年の暮ごろにつくったものである（当時総司令部は、すでに昭南からサイゴンへ去り、そのあとに設置された第七方面軍司令部の参謀部二課の所属になっていた）。

これより早く、十九年の初めごろに分室から分かれて特務機関となったものに浪機関（吉永少佐進級）がある。浪機関は昭南周辺の島嶼部、スマトラ、ボルネオなどの治安情報の収集を主任務としていた。

また文書謀報のエキスパートといわれた石田少佐以下数名が、調査室から分かれて、バンコクへ行き、第三十九軍（昭和二十年七月に第十八方面軍に昇格）所属の石田機関を作った。昭南には、ほかに海軍が潮機関をもっていた。

浪機関や茨木機関ができた背景には、ジョホール州や昭南島における抗日分子のテロ活動が活発化し、治安が悪化したという事情がある。また当時の第七方面軍司令官土肥原賢二大将は、かつて中国で特務機関長の経験もあり、特務機関が好きだったからでもある。茨木機関は、昭南の反日分子やジョホール州山中に蟠居する共産軍の動向に関する情報を集めるとともに、敵の進攻の場合はゲリラ活動をする任務を帯びていた（ジョホール州を守る第四十六師団は、昭南の防衛強化とともに、マレーの第二十九軍から離れて、第七方面軍直轄となっていた。そこで方面軍参謀部の下にある茨木機関は昭南だけでなくジョホール州も担当した）。

茨木少佐は、たいてい中国服姿で、インド人の運転する車で本部にやってくる。彼の住居は二軒あるとのことだった。出勤時間は不定で来ない日もある。出勤すると、円柱をめぐらした二階の大広間の椅子にどっかと坐り、だれかを呼びつけては大声でどなっているか、駄洒落をとばして笑っているかである。

彼が幹部候補生出身の将校としては異例ともいえるべき少佐に昇進したのは、中野学校出であること（一般兵科の幹部候補生上がりの将校より昇進が早かった）、何回もめざましい手柄を立てたことのほか、現役志願をしていたからであろう（幹部候補生出身の将校は、すべて予備役であるが、現役志願——つまりプロの軍人志願——をすると、序列が予備役のものすべてを追い越して、士官学校出の現役将校に次ぐものとされるならわしであった）。

二人の幹部、安達、近藤両大尉も幹部候補生出身で、どこことなくインテリ臭があった。

本部は通信網の中心であり、謀略資材の集積所でもあった。通信、庶務、給養、兵器などの業務を担当する准尉以下の下士官兵、民間人がおり、底辺には運搬係、炊事夫、マレー人の女中やボーイ、インド人庭師などもあった。本部に住み込んでいるものは二十人以上を数えた。その中には、マレーで捕まって連れてこられた中国人スパイの女もいた。

本部から離れた別の場所に通信班、爆薬班があり、挺身隊に徴用された六人の日本人女性が働いていた。前身はいずれも料亭の女中や仲居である。また一人、庶務をやっている中年の女性もいた。

その他、昭南市内に二カ所、ジョホール州内に三カ所の要員養成拠点があり、軍属たちがインドネシア少年にゲリラ戦士の訓練をしていた。機関の第一線部隊ともいべき工作隊はジョホール州に展開中で、次でスマトラの北端のアチェ州にも展開が予定されていた。ジョホール州南部に第一工作隊（安達大尉）、北部に第二工作隊（近藤大尉）をおき、要員の数は両方合わせて約五十名、主として商社の駐在員に化けていた。

彼らは地方の警察と協力して、州内の共産軍の動向を探るとともに、これに接近して協力関係を打ち立てることを目標にしていた。もうこの頃になると、軍は、占領の初期、中期のように彼らを討伐するのが不可能なことを覚り、宥和政策に転じていた。連合軍反攻の場合、腹背に敵を受けないように、アジア人の団結を強調し、ある程度彼らの要望——自治権——を認め、共闘して英軍に当たることも考えていた。

それができないうちに終戦になったのだが、共産軍はずっと前から英軍将校の指導と武器、食糧等の供給を受けており、かりに日本軍が大幅に譲歩しても、共産軍との妥協は困難だったと思われる。

ジョホール州における機関の最大の基地は州都ジョホール・バルにあった。ここは要員の訓練所、通信基地となっていた。敵が攻めてきた場合、昭南島でのゲリラ戦は困難（土地が狭く住民は敵性の中国人が大多数であるため）とみて、茨木少佐はジョホールの山中で長期間抵抗する計画を立てた。そのため謀略機材や食糧をジョホール・バルの基地に、どんどん送り込み始めた。しかし、それが終わらぬうちに終戦となった。

機関の要員は全部で百数十名にのぼったが、その他に異色の存在があった。それは敵国である中華民国の軍人たちである。一番の人物は陳奇山という大佐であった。陳はシンガポール陥落後、残置業者として島内に潜伏し、無電で重慶へ情報を送っていた。日本軍は、この怪電波に気付いたが、発信の場所が、なかなか探知できなかった。調査室と憲兵隊の協力で、四カ月かかってジュロン地区にあることを突き止め、一味十二名を逮捕した（ジュロンは現在は工業地帯となっているが、当時はゴム林がジャングルの淋しい場所だった）。

参謀部二課は、彼らを処刑するよりも生かしておいて利用することにし、前と同じように重慶へ情報を流させた。もちろん偽情報である。陳は命を助けてもらった代りに、抗日分子の所在など、治安対策についてアドバイスした。彼のほかバンムタ中尉や女のオペレーターなどが一味の中にいた。

中国軍大尉の王桐傑も、陳と同様の残置業者だった。彼はスマトラの首都メダンで、一味六名とともに二十五軍の憲兵隊に捕まり、死刑になるところを、近藤大尉が貰い下げたものである。二十五、六歳、赤ら顔のちょっとした男前で、小太りのいい体格をしている。中国の大人ともいべき色々たるところがあり、マレー語はもちろん、日本語も片言ながら話せた。

もう一人協力者がいた。蔡和安という五十五、六歳の華僑で、陳大佐が引っ張り出してきた男である。これも抗日分子として憲兵隊に捕まっていたのを貰い下げたものだった。

彼は南洋華僑の有力者の一人、陳嘉庚の子分で、陳が、戦争中海外に逃げていた間、その財産管理人をしていた。商売は米屋、雑貨屋兼船主である。店は大きくないが、ジャンクをたくさん持っている。でっぷりとして一見柔和である。その顔に似合わず、直情径行の単細胞であった。親分肌で気前がよく、人づきあいがよい。日本人みたいな男だ、と茨木少佐は評していた。

彼は政治を論じるのが好きで「英国があれば、もろく敗れるとは思わなかった。だが武力行使は間違いだ」とか「日本は中国に侵入して大失敗した。日本と中国の喧嘩は、実はアメリカが中国をおだてて日本と戦わせたのだ」などといった。

彼は黒十字会という団体を主宰していた。これは日本側の肝入りでできたもので、慈善団体の看板をかかげている。その組織を作ったのは王桐傑である。いわば日本軍に協力する大政翼賛会みたいなものだが、内容は必ずしも対日協力ではなかった。その中には相当有力な華僑やユースランが入っており、実際は反日分子で固まっているといってもよかった。日本側でも、それは承知の上で、むしろ反日分子を集約するために、その組織を作らせたともいえた。

黒十字会は、時々、米や飯を公定とヤミ値の中間ぐらいで市民に売った。食糧不足に悩んでいる市民には好評であった。

その米の出所は密輸であった。日本軍公認というより、日本軍がやらせた密輸である。創案者は船曳という右翼の大陸浪人だった。彼は華北で中国人に密輸をやらせた経験を応用したのである（この船曳は、でたらめが過ぎるというので参謀部二課長の吉田長秋大佐が内地へ送還した。しかしそれには非常な抵抗があった。船曳は、南方軍の最高軍政顧問である砂田重政の子分であり、方面軍上層部にも種々のつながりを持っていた。そのため吉田課長も、なかなか彼を引っ括ることができず、やっと土肥原司令官に直訴して憲兵に逮捕させた。しかしその後、吉田大佐は、中野学校出の連中から、「そういうことをやると、あなたの身が危くなりますよ」と忠告めいた脅迫を受けたという）。その他にも、船曳のように得体の知れない浪人がうようよしており、軍の上層部に食らいついでいた。

船曳の方策は、昭南にある砂糖、煙草、衣料品、薬品などを、ビルマ、タイ、仏印など、これらの物資の不足しているところへ運び、米と交換してくるのである。物資を輸送するジャンクは、数トンしか積みぬ小型のものから、二百トン、三百トンも積める大型のものまであり、多いときには、一カ月に百八十隻〜二百隻の密輸ジャンクが入港した。その米の半分を浪機関が軍に納入し、残り半分は船主（蔡など）が取る。その中のさらに半分は黒十字会の慈善事業として街頭で売り、その売上金を浪機関が工作資金に使った。蔡は、おかげで大金持になった。軍も多量の米を集積し、終戦時には八年分の米があったといわれる。

この密輸を通じて、いろいろな情報が入ってくる——というのが関係者のいい分であった。しかし二課長の吉田大佐は「華僑に儲けさせているだけのことだ。情報をとるといっても、何もとれないではないか。蔡というのは強欲なだけの男だ」と苦りきっていた。

この吉田大佐は、昭和十九年にフィリピンから転任してきたのだが、軍の上層部の硬直した考え方に反発し、世をすねたようなところがあり、部下からは、変り者、怠け者と見られていた。彼は特務機関を配下に持つ二課長でありながら、特務機関に批判的だった。

「謀報部隊には独立した能力はない。本筋からいえば、敵を負かすだけの武力があってこそ、初めて有効な活動ができる。しかしもう日本軍には武力はないに等しい。いくらやってもだめだ」

「日露戦争で明石大佐が成功したのは、英国が日本を助けたからだ。英国が日本を使ってロシアを討たせたのだ。このように強力なバックアップがあって、初めて成功するのだ」

「謀略が、かつて成功したためしがない。日中事変で汪兆銘を引っ張り出したのが関の山だ」

「中野学校出は、何の役にも立たん。三文の値打もない奴らだ。金を使うばかりだ。奴らは秘密主義

で、監督するといやな顔をする。会計検査も何もさせない。金をいくら使ったか、全く分からない」第七方面軍の特務機関は、当時総計一千万円の金を使っていたという。現在の金にして二百億円ぐらいになるう。

明石大佐は金の使途は一々細かく記録し、いやしくも公金を私消するようなことは絶えてなかったといわれるが、昭和時代の特務機関には、その廉潔さは求め得べくもなかったようである。

吉田大佐は参謀長や参謀副長に、たびたび特務機関の肅清を具申し、密輸をやらせる浪機関は有害無益だから潰しましよといったが、上の方がうんといわなかった。茨木機関については「茨木が勝手につくり上げ、事後承認の形でできたもの」で「勝手に男だ。報告もしない」と怒っていた。

彼は綾部橋樹参謀長（中将、二十七日期）と茨木機関を検閲に行ったことがあった。そのときインドネシア人の青年たちが、匍匐（ほふく）前進をやってみせた。「何だ、歩兵のやることをまねているだけじゃないか」と彼は苦々しげにいった。

彼の下にいる芋生喜久真中佐（四十三期）は特務機関をかばう。芋生中佐の後任の桑原中佐は、もともと謀略畑の出身だから、特務機関の育成に熱心である。吉田大佐がひとり特務機関の肅清を叫んでもどうにもならず、彼は宙に浮いた形だった。

しかし彼も謀略部隊を利用する考えはもっていた。英軍の上陸地点をタイの南部、クラ地峡とみていたが「そのとき最大の問題は戦車対策だ。戦車を燃やすようにしろ。それを謀略部隊にやらせるべきだ」といっていた。

彼は快々（おうおう）として楽しまず、終戦直前に東京へ転動になった。特操の特務機関転用の話が出たとき「やっても役には立たん。しかしやりたければ勝手にやれ」とサジを投げたようなことを

いった。

吉田大佐が転動してから後任の二課長は来ず、桑原中佐が代理をしているうちに終戦になった。桑原中佐は北一輝、大川周明を尊敬し、維新の志士気取りのところがあったが、人格円満で部下の意見をよく聞いた。身なりにかまわぬ野人肌で感激家であった。

茨木機関への配属が決まった特操の中で、岡橋節三（兵庫県・京大）と神代正夫に真っ先に呼び出しがかかった。神代は剛毅、何事にも一言をもつ男である。岡橋は温厚、慎重で、無線機の製作、修理ができた。茨木機関長は、この二人は使えろとみて、最初に声をかけたのである。今からすぐ荷物をまとめてこいという。外には乗用車が待っていた。運転手は、二十五、六の色白で、ひよわな感じの男だった。彼は「です」言葉を使ったが、先輩が先輩に説教するような口のきき方をした。

桑原中佐の宿舍だという立派な邸宅に着き、カーキ色の軍服など軍隊くさいものは全部おいて行け、といわれた。脱いだ服を物置に放り込み、縮みのシャツと袴下だけの姿になって、また車に乗り込んだ。靴は軍靴のままだった。

リバレーの本部につくと、白の開襟シャツとズボンをくれた。安達大尉が出てきて、マレー人らしい若者五、六人を紹介して、これからこの連中と一緒に暮らせ、日本語を使うなといった。彼らはマレー人ではなく、アチェ人ということだった。

本部には庶務の加賀美照准尉、東京外語のマレー語科出という森曹長、姫野軍曹、彼らを案内してきた山田軍属その他、運転手や炊事夫などがいた。機関長の茨木少佐や、安達、近藤の両大尉は、時々顔を出すだけだった。

中国人の大尉や女もいた。彼らがなぜここにいるのか、わからなかった。中国人の大尉（王桐傑）は気さくな男だった。中国人の女はマレーで捕まった共産匪の一味だという。

ある町外れに、汽車がぎまんで極端にスピードを落とす箇所があった。そこは線路がカーブになっている。憲兵が怪しんで見張っていると、女が飛び降りた。後をつけて、店に買物に入ったところを捕えたが、どうしても口を割らない。昭南に連れてきて、吉井という三十五、六の女をつけ、映画見物に連れていったりしているうちに、二、三カ月たって、やっと白状したという。

神代は間もなく事務所の主任になった。といっても、加賀美准尉と、女性の吉井が事務をやり、彼は判コを押すだけだ。彼と岡橋を車に乗せて連れてきた山田軍属も彼の部下になった。

ある日、同期の西川則隆（奈良県・京大）が興亜（煙草）を分けてくれとやってきた。マレー組の神代は、ジャワ組の西川を見知っているが、西川の方は神代を知らなかった。神代が、偉そうにふんぞり返っているので、西川は敬礼して丁寧な口をきいた。神代は知らん顔で興亜を分けてやり、奴はまだ軍隊臭が抜けていないな、と笑いたくなくなった。

五十すぎの満州浪人くずれが、ガソリン券をくれ、といってきた。神代が断ると「板垣にいつけてやる」と捨てぜりふを吐いて出ていった。板垣とは方面軍司令官板垣大將のことである。

吉井という女性は、軍政府の誰かの秘書として渡ってきたらしい。ときどきどこかへ出かける。陸軍病院の中に拠点をもっているという話だった。味方の中に拠点をもつというのはどういうことなのか分からなかった。小柄でやせていて、少し出っ歯である。おきょうな感じで、よくしゃべった。

夜中に森曹長が、中国人を引っぱってきてなぐっていた。目かくしをされたその男は、なぐられるままになっていた。神代がわけを聞くと、アチェ人を馬鹿にしたからだという。馬鹿なことをする奴

だ、と神代は思った。

アチェ人の若者たちが、プアサ（断食月）のときには、アチェに帰りたい、といいだした。それがきっかけで、アチェの話になり、森が「アチェでは司政長官が悪い」といいだした。その飯野庄三郎司政長官は、東條大將と同期（十六期）の退役少將で、親オランダ派を重用しているという。森はアチェの事情を長々と説明したあと、青木英五郎という人がアチェに長くいて、昭南へ帰ってきたばかりだから、よく事情を知っているという。青木という人は弁護士で軍政府の法務官だった。

神代は岡橋を誘って、青木法務官のところへ話を聞きに行った。彼は森のいう通りだ、といい、いろんな資料をくれた。そして「司政長官をぶった切るぐらいの覚悟がいる」といった。神代は、こんなインテリがいうのだから間違いはないだろうと思った。

帰ってきて安達大尉にその話をする、安達大尉は「よそでそんなことをいうんじゃないぞ」とたしなめた。その安達大尉も森や青木法務官と同意見で、工作には大衆の心を掴まねばならぬ、一人のラジャ（土侯）よりも十人の平民だといった。彼はアチェ州政庁で特高主任をやってきたので事情にはくわしかつた。

「悪い奴は殺してしまえ、だ」
神代がいった。

「それでアチェ人がついてくるなら、私がやります」

すると、安達大尉は顔色を変えて、早まったことをするな、といった。

その後、茨木少佐が「神代、おまえはアチェへはやらんぞ。何をしでかすか、わからんからな。森と山田をやる」といって笑った。

本部から歩いて十五分ぐらいのところに、無線機と爆薬の工場があった。工場とは名ばかりで住宅を利用した小さなものである。無線機工場では、通信学校出という大田軍属が中国人、インド人の工員十人ぐらいを使っていた。その太田が病気になる入院したので、岡橋が代りに行け、といわれた。製作を監督する役目である。

通信機は、かなりの数ができていたが、肝心の発電機がなかった。これがなければ送受信ができない。岡橋は、その費用捻出のため、貨物廠へ行って米を八十俵もらい、ヤミで売った。その金は十ドル（海峽ドル―米ドルの約半値）紙幣が一杯詰まったメリケン袋三つにもなった。数えてみると、約五十万ドルである。それでガソリン・エンジン付の発電機が約十台ぐらい買える見込が付き、まず五台買った。みな中古品で、そのうち一台は、どうしてもエンジンがかからなかった。夜中にエンジンをかけていると、隣家の中国人から文句が出た。

この工場には、岡橋のほか、日本人の女が一人と、マレー人の召使三人が住み込んでいた。工員は通いである。女は二十五、六歳で、料亭から徴用されたものである。小柄で丸顔で美人の部類に属した。おとなしく、無線機造りの仕事もよく手伝った。岡橋が時おり本部に顔を出すと、茨木少佐や安達大尉が冷かし半分に「あの女に気をつけろ」といった。

女には少尉の彼氏がいた。その彼氏は貨物廠勤務なので、女のところには、布類やラックスの石鹸やバターなど、いろいろな物資があった。少尉は週に二、三度、夜やってきては、朝帰りした。

無線機工場の筋向かいに、爆薬工場があった。小松隆がそこに配属されていた。徴用の女たち五人が、小松の指導で缶詰や、椰子の実に火薬を詰める仕事をやっていた。

その隣に、スマトラ要員を養成している拠点があり、亀田頼幸（大阪市・天理外語）がいた。

茨木機関のものだけで敵味方に分かれ、夜間演習をやったことがあった。飛行場の弾薬集積所などに紙片が置いてある。攻める方はそこへ行って、時限信管を置いてくる。それは二十分ぐらいで火を吹くようになっていた。どんな手段を使ってもかまわれないが、向こうにはちゃんと番兵がいるので、容易ではない。だが、お互いに敵味方がよく分かっているないので、成功する場合もあった。結局、半分ぐらいが成功し、半分が失敗して捕まった。

八月に入ると、機関は展開のため、ジョホール・バルへ移動することになった。大量の武器や食糧などを運ぶのが一苦勞である。機関には、トラックが一台しかないのので、まずそれを確保しなければならぬ。吉井が、ジョホール州を準備する第四十六師団の輸送隊の隊長を籠絡して、トラック十五台を持ってきた。

すると、たまたま居合わせた茨木少佐が「軍の車を使うとは何事だ」と怒りだした。軍隊に関係があることを衆目にさらすではないか、というわけだ。茨木少佐は、神代をなぐりつけんばかりの見幕だった。

結局、ある商社の車を借り、ジョホール・バルの新しい本部へ物資を送り込んだ。そのため吉井は貯金一万円をはたかねばならなかったと泣いた。

武器は、ほとんどシンガポール占領当時の押収兵器だった。ピストル、小銃、自動小銃、手榴弾など驚くほどの量があった。手榴弾は何百箱とあったが、信管がついていなかった。マレーの警察へ赴任する連中に、神代はそれを知らずに渡した。あとで聞いた話では、共産匪へ投げつけたのを、拾っ

て投げ返されたが、爆発しなかった。おかげで命拾いをしたそうだ。

私は、一人だけで市内の一拠点に派遣された。そこはオーチャード・ロードをずっと上がったっていった植物園に近いあたりで、オレンジ・グロブ・ロードという閑静な高級住宅地だった。低い生垣に囲まれた前庭の芝生が広い。そこには小野、稲川という三十すぎの二人の軍属が、アチエ人青少年十数人をあずかっていた。小野さんが班長で、稲川さんが副である。私は客分の形であった。少年たちは通信機をいじったり、時には尾行訓練をする程度で、大した訓練を受けているわけでもなかった。

私は赴任のとき、何がしかの金をもらい、服や靴を買った。また稲川さんの世話で、海没した軍刀を、ある邦人にズボンと取りかえてもらった。そこで、どうやら民間人の服装ができた。

両氏と雑談しているうちに、特務機関の内情や、昭南の町のことなどが少しずつわかってきた。彼らは自分たちの前歴を語りたがらなかったが、商社から特務機関に入ったといっていた。後に他の人から聞いたところでは、二人とも南支(華南)で特務機関にいたという。小野さんは山口県出身で、小柄だが、赤味をおびた精悍な顔をしていた。稲川さんは、やせ型で背が高く、目が大きかった。神奈川県出身だといっていた。

私は稲川さんと、よく冗談をいいうようになった。

何もしないでいては申訳ないので、私は生徒たちに柔道を教えることを申し出た。前の芝生が格好の道場になった。少年たちは興味があるらしく、喜んでやった。

受身から始めて大外刈り、内股など、いくつかの業(わざ)を教えた。驚いたことに、彼らは全く弱かった。日本の青少年なら、柔道を知らないものでも、もっと手ごたえがあるはずだった。ところ

が彼らは腰にねぼりがなく、こういう格闘技には向いていないのではないかと思われた。

どうやらモノになりそうなのは、二人だけだった。一人は仲間からも一目おかれている不良じみた少年で、クリス(短剣)の扱い方に長じていると噂されていた。彼は激しく私に挑みかかってきた。

もう一人はウスマンというおとなしい真面目な子で、この子も運動神経がすぐれていた。私は自然、この少年に、稽古をつけることが多くなった。

昼休みに、アブドラというのが「先生はウスマンが好きです」といった。アブドラは、柔道はからきしだが、愛嬌のある明るい少年で、通信機をいじるのが好きだった。仲間からはドラと呼ばれている。私がドラというのは日本語では遊び好きの子供という意味だ、といったら、回りの者がどっと、はやしたてた。

私は、今のドラの一言に、はっとした。おそらく、私がウスマンを偏愛しているという噂が立っているに違いない。彼らは日本人の一挙手、一投足に注目している。気をつけなければならないと痛感した。

本部に顔を出して帰ってくると、家の横の狭い道で、小野さんが古い、オモチャのような自動車のフードをあけて、のぞき込んでいた。私を見て、にたと笑った。聞けば、員数をつけてきた車だという。小野さんも稲川さんかねがね車がなくて不便だといっていた。そこで、どこからか、かっぱらってきたのだ。オースチン・セブンといい、小野さんによれば、古いが名車だという。

翌日、小野さんは少年たちを動員して、その車のあちこちを金槌で叩いて変形させた上にペンキを塗った。

しかし、四、五日たつと、その車は見えなくなった。小野さんは邦人の車だということが分かったので返した、といった。

その車の後押しをやらせたとき、少年たちは情ないほど力がなかった。何だ、もっとがんばれ、と気合をかけると、彼らは声をそろえて「カンコン、カンコン」という。ふしをつけて歌っているみたいだ。何のことだと聞くと、にやにや笑って答えない。やっとカンコンばかり食べさせられているので力が出ない、といていることが分かった。食事は南兵営と大差ないぐらい粗末だった。小野、稲川両氏と私には一品余計に付いたが、とても満足できるような食事ではなかった。私は町に出ると、きまってビーフンを食べることにしていた。食べ盛りの少年たちが腹を減らしているのは無理もなかった。

稲川さんが気晴しにと、遊技場の大世界や新世界を案内してくれた。その後、私は一人でちょくちょく出かけた。何しろ回りは白い目を向ける中国人ばかりで気味が悪かった。にぎやかなバンドの演奏は、中国人たちが日本人を馬鹿にして、わざと陽気にはしゃいでいるのではないかと思われた。

ジャラン・ブサルという街娼のたむろする場所へも行った。街娼たちは日本軍の憲兵をこわがっていた。初めのうちは、イムビ、イムビというのが、憲兵のことだとは分からなかった。遊んでいるのを憲兵にみつかると日本人も街娼も捕まえられるのだそうだ。この地域は治安が悪いとか、衛生上よくないとか、あるいは日本人の品位をけがすといった理由で、日本人を近づけないようにしているらしかった。

宿舎の近所をよく散歩した。人影が少なく気味が悪いぐらいである。街路の標識に英語の名前ばかり書いてある。私は南方の風物に英語の名前はそぐわないが、これが英国の力だと思った。

リバレーの本部には、二、三日ごとに連絡に行った。宿舎には電話がないので歩いて連絡するよりながった。十五分ぐらいかかった。本部の事務所には、アイリンという小柄で目の大きい中国人の娘がいた。可愛いので、時々話しかけたが、会話は三分と続かなかった。それは私の英語がまずいということよりも、共通の話題がないためである。育った環境、考え方の違いの大きさが感じられ、これから展開したときのことが思いやられた。

マレーの共産軍

私がマレーに共産軍がいることを知ったのは、茨木機関に入ってからである。「へえ、南方にも共産軍がいるのか」と驚いたのは私だけではなく、仲間みんながそうだった。

マレーの共産軍（日本軍は共産党遊撃隊、あるいは共産匪と呼んだ）は、英軍が敗退したときに遺棄した兵器で武装し、山中の隠れ家から出てきては、日本軍の連絡兵や小部隊を襲ったり、通信連絡線の遮断、汽車の運行の妨害、へんぴな場所の警察署の襲撃、親日的な現地人の殺害などを行っている。日本軍に対し、大規模な攻撃を仕掛けるほどの実力はないが、散発的なゲリラ活動でも日本軍警備隊を奔命に疲れさせるに十分だった。

マレー共産党の始まりは、一九二五年（大正十四年）に中国から逃れてきた者らによってその五年後に結成された南洋共産党とされている。彼らは三十年代の不況を背景に労働争議を指導し、主義の宣伝に努めたが、英官憲の取締りはきびしく、数度にわたり幹部が検挙され中国へ送還され、勢力は

微弱なままにとどまっていた。しかし日本軍がマレーへ進攻すると、英側は対日戦に彼らを利用することにし、チャンギー刑務所から二百人の党員を釈放し、ゲリラとして一週間訓練し、日本軍の後方へ潜入させた。これが「マレー人民抗日軍」(Malayan People's Anti-Japanese Army—略称M P A J A)という組織へ成長していったのである。それは非共産系の一般中国人も糾合していた。三つ星のバッジをつけていたので三つ星軍とも呼ばれた。それは三つの民族——中国人、マレー人、インド人——を表わすと称したが、実体は中国人だけの団体であった。終戦時には、その兵力は約七千といわれた。この共産軍と協力する少数の英軍ゲリラも山中に潜んでいた。英軍の野戦保安隊といわれるもので、マレーで活動したのは一三六部隊である。日本軍の占領時に残ったいわゆる残置諜者や、その後、夜間、潜水艦による上陸、あるいは飛行機からの落下傘降下で潜入した連中から成っていた。彼らは共産軍を指導し、また兵器弾薬その他の援助を空輸によって行っていた。とくに昭和十九年十二月以降は、これら秘密隊員の降下、物資の補給が急増した。そのためインドの基地から飛来したB29の出動回数は一千回以上に及び、降下したものの五百十一人、約六百八十トンの物資が投下されたとされる。

共産軍は山中にもっているもので、食糧その他の補給には、どうしても人里に出てこなければならぬ。それを援助するのが、ジャングルのへりに住みついている中国人農民であった。また町や村の中には党員やシンパが多数いた。

マレー共産党の最終目標は英国人を追い出して人民共和国を建設することにあつたが、当面の侵略者日本軍を追い出すために、「帝国主義」の英国と手を結んだのである。事情は英国の方も全く同じで、共産党にはびこられては困るのだが、日本軍をやっつけるための一時の方便として同床異夢の協力をしていたにすぎない。だから戦争が終わると両者はたちまちに対立し、英植民地政府、その後をうけたマレーシア政府は、共産ゲリラ討伐に手を焼くことになった。

当時の私は、こういう事情は全く知らなかった。ただ共産軍がいて、日本軍を妨害している、と聞いただけである。

八月の初旬になると、私はジョホール・バルの新しい本部へ移るように命ぜられた。私は軽い気持ちで小野、稲川両氏、少年たちに別れをつけ、ほとんど着のみ着のままでコースウエーを渡った。

ジョホール・バルの本部は、コースウエーを渡って右に入ったら坂の途中にある、細長い、学校のような二階建だった。入って左側に小さな住宅があり、私にはその一部屋が与えられた。入口のすぐ右に栗のイガを赤く染めたような実が一杯なっている木があった。ランブータンというのだそうだ。

私が着いたときは、本部の移転が終わったばかりで、荷物の整理もできていなかった。

そこにはすでに特操仲間が数人いた。その中の一人、日高操(長崎県・東亜同文書院)は、地図の上に共産党の動静を書き込む仕事をしていた。五万分の一のジョホール州の地図を張り合わせて床の上に広げ、商社員や警察分署長として各地に展開している機関員からの報告を、その上に書き込むのである。その情報資料は茨木機関長から方面軍の綾部参謀長に届けられることになっていた。

日高はまた共産党の印刷物の翻訳や、憲兵隊が共産党員を訊問して得た資料を報告にまとめる仕事もしていた。ジョホール州を警備する静兵団(第四十六師団)は、常時、一個中隊を共産匪討伐にぶり向け、党員を逮捕すると、憲兵隊に引き渡していた。

軍は、表面ではこのようにいぜんとして、弾圧策をとりながら、裏面では共産党との和解、協力を策していた。その役割を担うのが特務機関であった。

日高は、ここで、初めて岸山勇次曹長に会った。岸山はマレー東方のアナンバス諸島に展開していたが、終戦間近しとみて引き揚げてきたのである。岸山の話は興味深かった。彼は北海道旭川の出身で、キスカ島撤退作戦にも関係し、ソ連に密偵として入り込んでいたこともあるという。日高は、岸山と気が合い、つきあっていくうちに特務機関員として大した能力を持った男だと感嘆するようになった。岸山は三十年配、一見したところひょうひょうたる感じである。酒は飲まず、大きな声は立てず、冷静で、やや陰気でなくもない。目が少し斜視だった。冗舌ではなく、じっくりと話す。人物もじっくりしており、大胆で細心。語学の才能にも恵まれていた。日本に妻子があったが、家庭的には恵まれないようだと言高は感じていた。

彼が来たとき、だれも紹介してくれないので、日高には彼がどういう地位にある人物なのか分からなかった。とにかくひとくせある、ただ者ではないという感じはあった。茨木機関長と、対等に近いような態度で話しているので、相当古参の機関員だろうと察しがついた。そのうちに機関長が彼を非常に頼りにしていることが、言葉のはしはしから分かるようになった。

岸山は中野学校の下士官学生二期の出で、昭南の某機関にいたが、機密費捻出のため工作物資を勝手に売り飛ばしたというので、憲兵隊に捕まり、一等兵に降等され三年の禁錮をいい渡された。茨木機関長が、それを聞いて惜しい人物だと、法務部と交渉し、貰い下げて茨木機関で使うようになったのである。茨木少佐は彼を准尉として待遇し、部下を与えて活動させた。彼は知遇にこたえ、数々の業績を上げた。

私は、ここで岸山と顔を合わせたはずだが、何の記憶もない。岸山は存在を誇示するようなことをせず、私は鈍感で内にこもり、外に対して常に触角を働かせているような人間ではないので、彼の存在に気付かなかったのである。日高とも初めて会ったので、あまり親しく口をきくこともなかった。私の印象に残ったのは、初めて会った吉井だった。その妹というのもいた。二十五、六歳と思われたが、小柄でやせ型の姉とはまるきり違い、眉の濃い盤台面で骨太だった。本当の姉妹とは思えなかった。妹は感じが悪くて、ひねくれたもののいい方をする。姉は、いつも髪にバンドを巻いていて陽気なおしゃべりだった。

私が半ズボン一つになって部屋を整理をしていたとき、彼女が笑いながらそばへ寄ってきて「これ可愛いいわね」といって、私のへその下の毛を引っ張った。私があわてて、その手を押しのと、彼女は男のようにハッハッと笑った。

そのうちに、妹の方は、特操の某の彼女だという噂を聞いた。二人ともそのようなそぶりは全く見せないの、信じられなかった。だが男女の仲は、あるいはそんなものかとも思った。

私は、ここで茨木少佐に命令文を書かされた。ジョホール州の各地に展開すべしという作戦命令である。私は、それまで命令文を書いたことがなかったので、とまどった。お前そんなことも知らんのか、といわれた。まず一般の情勢、敵情を書き、命令者の意図を明らかにし、指示を与える。最後に予はどこどこにあり、と自分の位置を示す——こういう一般的な形式さえも知らなかった。予備士官学校は中途退学だし、特操になってからは、グライダーや飛行機の技術的なことだけしか習わず、初級士官としての一般的な素養に欠けていた。

だが、私は叱られながら、どうしてこんな命令文を書かせるのか、という疑問から抜けきれなかった。茨木少佐は「軍隊でも役所でも同じだ。書類で動いているんだ」といった。なるほど、そうかも知れぬ。これも軍隊には違いない。だが特務機関という特殊な存在だけに、証拠を残すようなことはしない方がいいのではないか、とくに作戦事項については、そうではないか、と思った。

私はときどき、ジョホール・バルの町を散歩した。いつ共産ゲリラに襲われるか分からないので、ベルトに拳銃をはさみ、上衣で隠していた。昼の町は、しんとしていた。見物するような場所は何もなかった。サルタンの宮殿の白い建物、なお白けて見えた。海峡をへだてて昭南島の森が平たく延びている。三年前、山下將軍は、このサルタンの宮殿から、あの島を睥んだのだ、などと感慨にふけた。

私たちが特務機関に転属してから終戦の日までの間に、連合国首脳によるポツダム会議の開催と宣言の発表、広島、長崎に対する原爆投下、ソ連軍の満州侵入と、矢つぎ早に大きな事件が起こっている。しかし私たちは何も知らず、知らされもしなかった。南方軍總司令官寺内元帥は、ビルマ、フィリピンの敗戦の心労から、この年の四月初めに脳溢血で倒れ、半身不随となっていた。そのことも、私たちは知らなかった。ただ漠然とした不安は常にあり、いつ最後の日が来るかと、身体に重石をかけられたような気分の毎日であった。

第三章 敗戦の混乱

聖戦目的完遂へ

「ヤマ」——特操の訓練所——には通信機があり、毎日、ニューデリー放送を聞いていたので、日本が手をあげるらしいとのうわさが、終戦の数日前から流れていた。カセイビルの屋上にある情報部では、ニューデリー放送によって、日本政府がポツダム宣言を受諾したことが十日にはわかっていた。ヤマの連中は、それを通信の下士官から聞いた。十五日の陛下の御放送は、雑音が多くて聞きとれなかったが、降伏の正式決定であることは察しがついた。

「こんな軍隊じゃ負けるはずだ」と自嘲的につぶやくもの、だまり込んでいるもの、「何とかなるさ」と平気な顔で冗談を飛ばしているもの、船を手に入れて、マレーから仏領インドシナ、南支と海岸伝いに日本へ帰ろう、というもの、昭南は中国人が多くて駄目だから、マレーへ行っってカンボンにもぐり込もう、五年もいたら、ほとぼりがさめるだろう、というもの、あるいは、四、五人集まってひそひそ話しているものがある。特務機関員は全員やられるそうだ、という話である。転属して、わず

著者紹介：本田忠尚（ほんだ・ただひさ）
1918年熊本県庄。1941年京都大学文学部卒業。陸軍特別操縦見習士官。朝日新聞、時事通信、外務省に勤務。訳書に宇土尚男のペンネームでデービス『國境を破ろう』、アービング・ホール・ウォリントン『ゆらぐ大英帝國——キラー事件』、スターン『予言』（以上弘文堂）、ロックス・ラニヨン『地球エネルギー資源地図』（サイマル出版会）などがある。現在大東文化大学講師。

現住所：〒203 東京都東久留米市前沢

4-29-20

検印省略

茨木機関潜行記

定価1500円

1988年2月20日 初版発行

著者 本田忠尚

発行者 山下三郎

発行所 株式会社 図書出版社

〒162 東京都新宿区白銀町16番地

電話 (03)260-0011 振替 東京 2-107172

印刷・アール企画印刷／製本・小高製本

© T. Honda 1988 Printed in Japan

0095—889001—5306